

ユングフラウ・アレッチュのスイス・アルプス

～ アルプスを描いた画家たち ～



スイスではハイキングのシーズンが近づいています。6月頃から始まり、7月初旬からが8月中旬がベストシーズンです。スイスの国花であるエーデルワイス(ウスユキソウ)やアルペンローゼなどが咲き、登山者に夏の訪れを知らせます。そして、夏山アルプスの雄大で美しい景観が眼前に広がります。

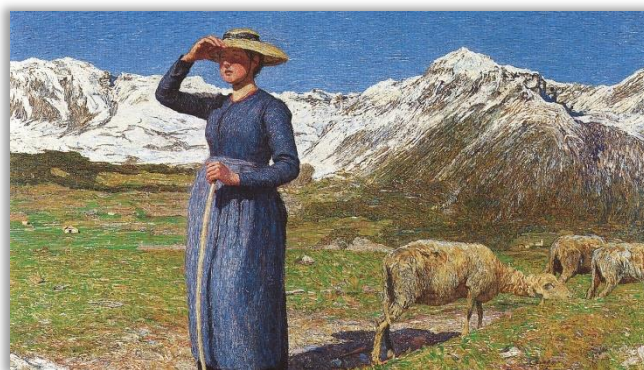
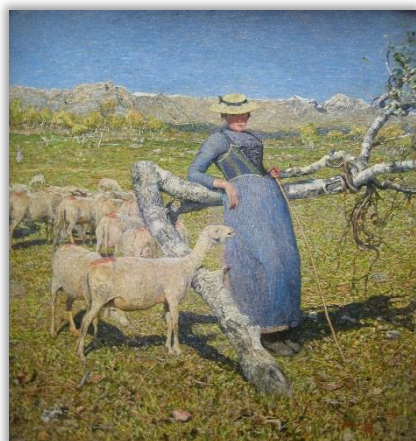
観光面でスイス・アルプスをご紹介しますと、日本人に人気のある2大観光スポットは、グリンデルワルトを基点としたユングフラウ(4,158m)とツェルマットを基点としたマッターホルン(4,478m)です。ちなみにフランスのシャモニーを基点としたモンブラン(4,810m)はフランスとイタリアの国境に位置しています。アルプスの最高峰はモンブラン、スイス・アルプスの最高峰はモンテローザ(4,601m)です。世界遺産に登録されているアレッチュ氷河は、スイスの中南部に位置し、ユングフラウ、メンヒ(4,099m)、アイガー(3,970m)に囲まれています。

現在のアルプスの姿は氷河の浸食により作り出されたもので、1,000以上の氷河が存在しています。しかし、地球温暖化の影響で氷河の後退が深刻な問題となっています。アルプスの自然美や景観美が損なわれないよう、世界は協力し合わなければなりません。書籍『すべてがわかる世界遺産大事典<下>巻<第二版>』の「ユングフラウ - アレッチュのスイス・アルプス」のページの最後の一文で、このように締め括られています。「アルプスの山々が織りなす風景は、古来多くの芸術家たちにインスピレーションを与え、文学や美術の題材として、ヨーロッパ文化に大きな役割を果たした。」……と。

その一文が指し示す先を、私なりに考えてみました。私が注目したのは「美術の題材」です。たとえば、レオナルド・ダ・ヴィンチ作の『モナ・リザ』の背景がアルプスではないか、という説があります。『聖アンナと聖母子』についても同様です。ジャック・ルイ・ダヴィット作の『サン・ベルナル峠を越えるボナパルト』も、背景にアルプスが描かれています。しかし、それらはあくまでも背景であ

って、アルプスを主題として描こうとしたものではありませんし、風景を主題にした作品でもありません。

そこで今回は、アルプスの風景に主題的インスピレーションを受けた画家をふたり、「実景を描いた画家」と「想像で描いた画家」をご紹介します。



ジョヴァンニ・セガンティーニ『アルプスの真昼』

(右) 1891年、大原美術館所蔵 / (左) 1892年、セガンティーニ美術館所蔵

まず、「実景を描いた画家」として日本でもお馴染みなのは、ジョヴァンニ・セガンティーニ（1858年～1899年）でしょう。セガンティーニはイタリア出身で、イタリア国境に近いアルプスの風景を数多く描いています。セガンティーニの油彩画は、画面がかなり明るく、発色がとても良いのも特徴です。代表作は、『アルプスの真昼（1891年及び1892年作）』の2作品。画面はなめらかではなく、凹凸があり、ギザギザしているようにも見えます。これは画家独自の技法で、他の画家でこのような技法はあまり見かけません。

油絵の具の特徴として、複数の絵の具を混ぜれば混ぜるほど暗色化していきます。つまり、“画面が暗くなる”。良く言えば、“画面が落ち着いてくる”。ところが、セガンティーニの作品では、これと反対のことが起きているのです。油彩画で発色を保ち、明るさを表現するには、絵の具を混ぜずに、そのままの色で画面に置いていく必要があります。セガンティーニは、これに留まらず、厚塗りもしています。明るさの表現が試みられている印象派作品よりも発色が強く感じられるのは、厚塗り部分の光の照り返しの影響のためで、ギザギザの正体でもあります。ちなみに、画家のパレットを見ると、絵の具をどのように混ぜたのか、原色のまま描いたのか、それを見極めるヒントに気づくことができます。実際にアルプスに行くと、特に夏場は日差しがとても強く、目を開けていられないこともあります。これほど眩^{まばゆ}い光の強さやコントラストを表現するにはどうしたらよいかと考えた末、この独特の技法に辿り着いたのでしょう。

セガンティーニが描いた地域は、サンモリッツ周辺、オーバー・エンガディンと呼ばれるスイス東部のイタリア国境付近一帯です。ユングフラウやマッターホルンのような象徴的な山が無い代わりに、山と谷が織り成す素朴なアルプスの風景が広がります。スイス東部観光の拠点となるチューリヒを基点とすると、グリンデルワルトやツェルマットは西方向、サンモリッツは南方向と全く別の方角なので、日本のパッケージツアーではあまり行かないエリアです。セガンティーニが晩年を過ごしたマローヤ村には、画家のアトリエが公開されています。また、サンモリッツのセガンティーニ美術館には、代表作『生』、『自然』、『死』の3部作があり、必見です。このオーバー・エンガディンから北へ100 kmほど北上すると、作家ヨハンナ・シュピリ(1827年～1901年)作の『HEIJI』の舞台となった地域が在ります。リヒテンシュタインとオーストリアの国境に近く、その観光拠点となるマイエンフェルトの街からハイジヒュッテ(山小屋)まで、日帰りでハイキングすることができます。マイエンフェルト駅までは、チューリヒから列車で1時間ちょっとなので、チューリヒから日帰りで行くこともできます。ヨハンナ・シュピリも、アルプスからインスピレーションを受けたひとりなのです。



ジョヴァンニ・セガンティーニ「アルプス三部作」(1898年～1899年)
(左上)『生』 / (右上)『自然』 / (中央下)『死』、セガンティーニ美術館所蔵

続いて、「想像で描いた画家」をご紹介します。

アルプスの画家というイメージは湧きづらいかと思いますが、画家の名は、ピーテル・ブリューゲル(1520年代～1569年頃)。彼の代表作、『雪中の狩人(1565年頃作)』について、お話をさせていただきます。

この作品は、構図がとても大胆です。手前に大木、狩人の先には急な坂、というよりは崖のように、落差が感じられます。その構図は、あたかも日本画のようです。大胆かつ繊細で、作品には影

もなく、枝の一本一本まで緻密に描かれています。色調がとても美しいと思いませんか。雪と木、白と黒のコントラスト。コバルトブルーの空の色、その空の色と呼応するような凍った水辺の風景が爽やかです。鳥が飛んでいます。この鳥を描くことにより、空間の広がり、空の雄大さがさらに強調されます。そして、遠くに見える鋭く連なる山並み、これこそ「アルプス」です。この風景は、ヨーロッパのどの辺りなのでしょう。はっきりと断言できる場所は、実はアルプスには在りません。ブリューゲルはネーデルランドの生まれ。平野の多いオランダには、このような雄大な山岳地帯がみられません。したがって、この作品は、実景ではなく、想像で描いた作品です。イタリアを訪れたことのあるブリューゲルは、おそらくアルプスの風景を見たことがあったのかもしれませんが。近景と遠景+高低差、画面全体が大きな空間となっています。画面構成と色調が特に素晴らしく、まさに傑作と呼ぶにふさわしい作品です。レオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロのような正確な描写力とはいかなくとも、それを超越した作品だと思います。ブリューゲルの作品は、「この絵のこの場所に行ってみよう」と思わせる作品が多いですね。



ピーテル・ブリューゲル『雪中の狩人』（1665年）
ウィーン、美術史美術館所蔵

「実景を描いた画家」と「想像で描いた画家」の代表とも言える画家と作品をご紹介しましたが、セガンティーはイタリア、ブリューゲルはオランダと、いずれもスイス出身ではありません。では、アルプスを描いたスイス出身の著名な芸術家はいるのでしょうか……。いいえ、そんなことはありません。

アルプスにインスピレーションを受けたスイス出身の著名な芸術家をご紹介します。日本でも企画展が開催されたことのある画家と彫刻家です。

現在の首都ベルン出身の画家でフェルディナンド・ホドラー（1853年～1918年）は、世紀末芸術の巨匠として知られ、アルプスの山岳風景をよくデフォルメして描いています。若い頃には、写実的なアルプスの美しい山岳風景も描いています。

同じくベルン近郊の生まれで、20世紀のスイスを代表する画家、パウル・クレー（1879年～1940年）は、抽象表現に近い独特の作風で知られています。ベルン近郊にはクレーの作品 4,000 点を

収蔵したパウル・クレー・センターがあります。

細長い人物彫刻で知られるアルベルト・ジャコメッティ(1901年～1966年)はエンガディン地方のグラウビュンデン州生まれ、アルプスの大きな石や岩の造形美からインスピレーションを受け、彫刻家になった芸術家です。チューリヒ美術館にジャコメッティ作品が70点以上収蔵されています。

「アルプスの山々が織りなす風景は、古来多くの芸術家たちにインスピレーションを与え、文学や美術の題材として、ヨーロッパ文化に大きな役割を果たした。」……まさにその通りではないでしょうか。芸術家たちは、雄大なアルプスから様々なインスピレーションを受け、数多くの傑作を後世に遺しているのです。

眼前にアルプスの山並みが近づくと、その雄大さに誰もが圧倒されることでしょう。その雄大さ、美しさ、爽やかさに心が洗われる気がします。ユングフラウにマッターホルン……最高です。皆さんもぜひ、アルプスに行ってみてください。ヨーロッパ旅行に気軽に行ける日が待ち遠しいですね。

沼田政弘



スイス・シルヴァースラーナのエンガディン村

～ちょこっとコラム～

ヨーロッパへのツアーでは、ミラノからパリへ、航空機で移動することがあります。ミラノのマルペンサ空港から離陸すると間もなく、右手にアルプスが見えてきます。右側の窓側の席がおすすめ。眼下にアルプスの雄大な景色が広がります。私も、遠方にマッターホルンの頂上を見たことがあります。それは、想像を絶するくらい壮大な景観でした。今でもこの目に焼き付いて離れない風景です。